

71  
3628  
3



門 71  
號 3628  
卷 3

安政見聞録卷之下



○夜と損て良人の死骸と捨る條  
そと人として信実と有とて後才養ふ能は達以とも信の心ある  
者へ人あて人れあて箇計りのこと維もよう初りぬることあがる色の  
勝よりよきものあて実と場とて事人ふ知るててて人勝より  
ぬてにぬる。月来あはれをうりや老あり近くは已富貴あること死する  
者も実あり。一時その積を失ふは落魄するに及びては親きも疎あり。  
死しては世にひらる老も更に路人の心ひてまると世に強くとまふは  
然るに程その好とて手さび貧富窮達に拘りてざるこそ信実あり。  
人とのあ。又子兄弟の括く措く。支辨は元他人あり。されども既れ支  
辨とありて互に信実を込てあはんと今きりぬれ及をねととの中

安政見聞録

足尾

早稲田大学  
第25.6.19  
録 禁





節婦衣を  
 捐て良人  
 の死骸を  
 収む

二二二  
 二二二  
 二二二

二二二  
 二二二  
 二二二



安政長門金

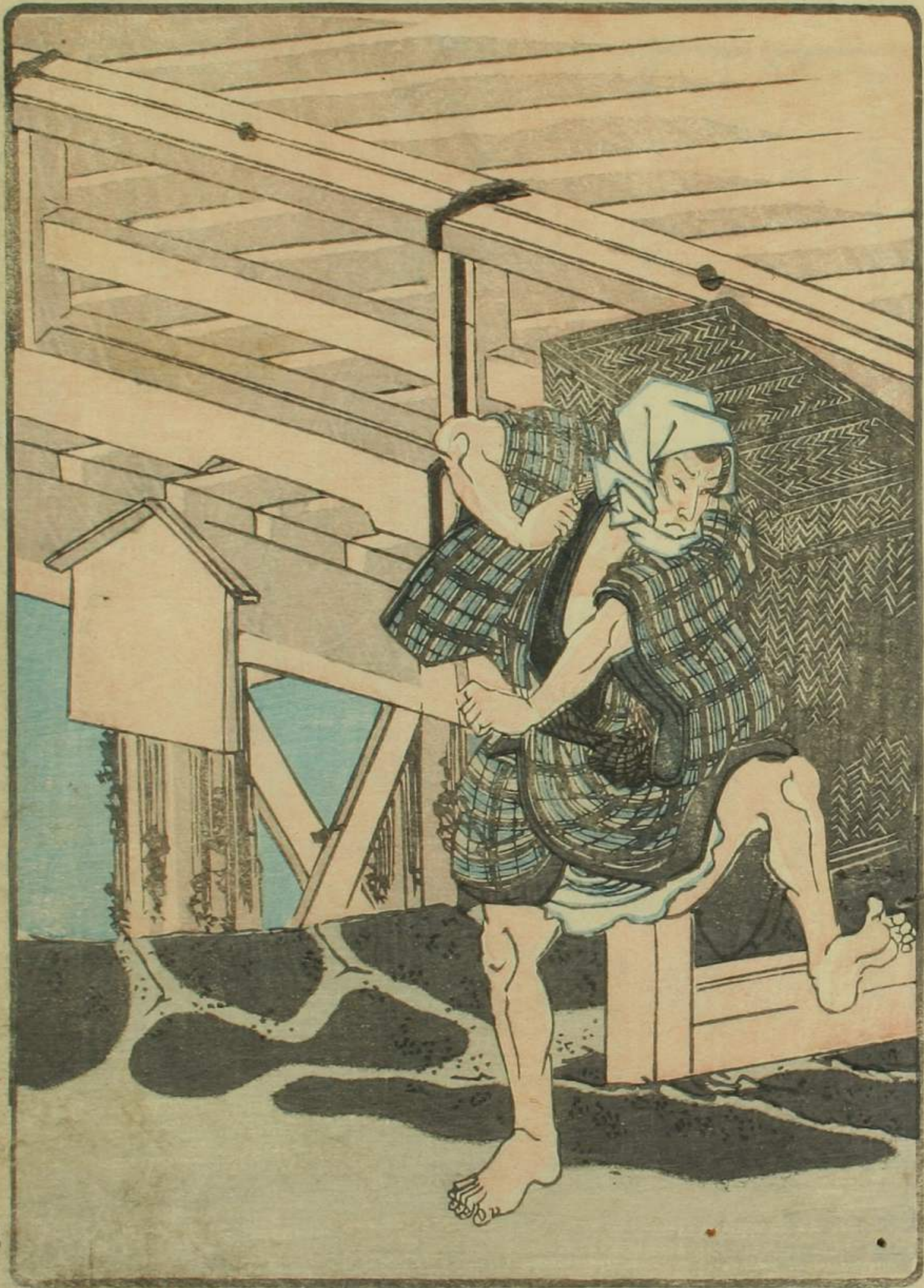
月辛卯

下二

の死骸と大不燻までい丈の恥有り。今一個人のあつた擔ひてその  
 場とてちまてんと口をこつてえとどこの擔ぎふて維と懸まんやうも  
 たり。あふ放てその婦の脊負、首筋をそ如下一蓋をあけて中  
 なる夜頼残りうく掛出—損丈の死骸と引起—力を極め抱きあ  
 げて。かの首筋の中にかの蓋をさ—矢と鎖でまて脊に負けらる。  
 始めあふ似むのと重くて他人物を持てさやうも—残り擔—とへん  
 どの。その夜と母と捨をきて。まづ火の脱とけしと今宵の強き何  
 方とそ程ある方ありト。仕立親族知事の方へゆらうとも幸の  
 ごとく。野を送りのあるさなうねが。浪草親者の裏衣の縁で知る  
 寺あり。まづ彼処へ負ちんと心細くも。一個浪草川の端に女  
 より。湖とと吾妻橋をうとんとせしと。元は兼二十四五のり。

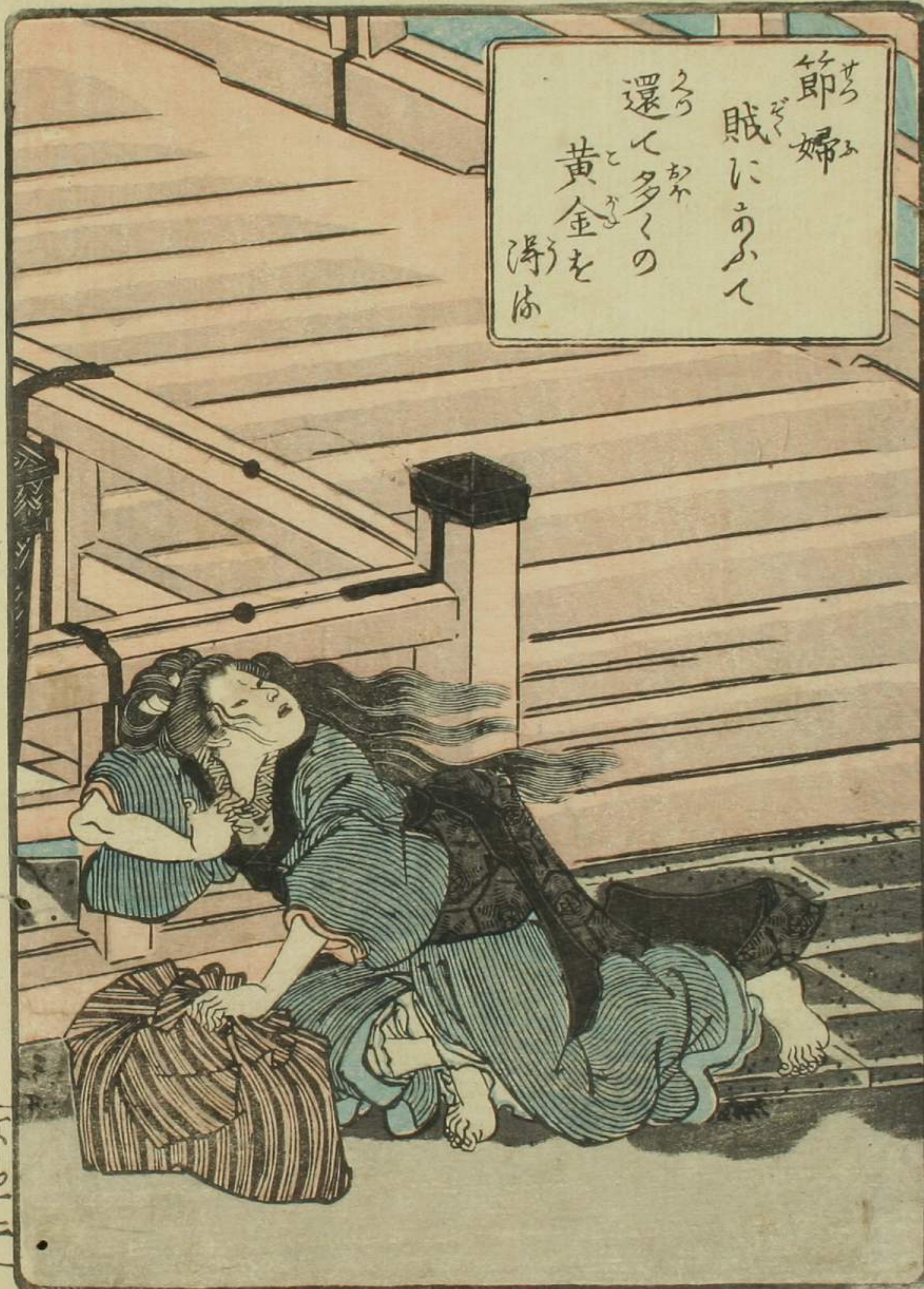
たり先ふなる。素かじりまをさる。女の男あて入きやうある。首筋を素  
 負て苦—うん己の山女の老る。この所小親族ありて今安否を待て  
 作る己の方の地着の履。おの崩すまをゆあひさ。かく遠方へも素  
 —の。さしと味味不見の人あまてと難をさる。思ひねば。とて首  
 筋を脊負て進せん。おん先ん立て。おん案内とせよ。とて女は是  
 を頼りて。その細を優—け。骨違す。面魂一餅ありと心れ推  
 一。その志の疎—け。とどの首筋をゆあひに。大の物の入と  
 へ。所人ゆいせせ。とひ捨て。彼男の行足と早め吾を  
 怪—き老と推—て。初のと拒む。若然らば。この累。とて首筋を  
 身ゆ大切のゆあ。おん方へ。質とす。心と安ん。とて首筋を  
 と。こせに負せ。かくり。箇指のと。おん。とて善根と。





二六

反乃



節婦  
 賊にあふて  
 還て多くの  
 黄金を  
 得た

忠臣蔵

反乃

下

らむ。その首飾の重げも。定めてよれおの在人とおのひその教ひを遊  
 ん。この暑ことごとくおなるべし。いづく純き決まるといへるえふかの鳥  
 跡の。おん身うまの死骸ありと。後小岡まで思くさ小溝堀ると  
 へらち送ばおん身が若拙の衣を捨て持出たり。赤心の水の沫とさ  
 がうこそさ。亦この暑こふかくなり。大金のあるまは。こまのまは  
 今まはと。このまは捨あるま。まは此よと。おてお裁ふ任に若  
 び。と衆後一変してその執と。その筋へおけり。とぞ。かくて盗人のか  
 首飾と負ひ。こを逃去りてより。後いづれぬ。けん奉実の知れ  
 と。鎌倉川岸の丘傍に。そのまは持ておけるが。首飾に町名且持  
 り。の名さへ記してありけ。まはま。とて所のお尋ね。来るてか。の妻と性  
 方を探し。こごとけり。妻のまの死骸を得て。教ふと。大とある。お願

て菩提院へ葬りて。懸懸に吊ひけり。かくて被盜人の遺金の金く。此  
 女が赤心に。神の授けのひ。あうんと。下し。さき。うばま。教び  
 のよ。佛子を務し。とあ

こ。小江都。浅草橋のき。に。賣し。く。着。以。釋。史。あり。若。き。や。ど。の。懸。ぶ。き  
 商人の廊に。務め。いと。様。儀。ある。若。あ。ま。は。人。の。二。ま。き。の。の。れ。の。ひ。做。せ  
 が。榮。枯。得。春。の。常。の。ち。う。ひ。その。う。お。年。と。に。ぬ。練。し。て。遊。く。召。仕  
 の。小。服。を。さ。せ。この。男。も。年。来。の。奉。公。も。空。く。なり。脱。に。服。に。あ。り  
 け。ま。は。泣。く。その。お。せ。と。ち。出。て。親。の。方。へ。帰。り。け。ま。は。親。の。時。七。十  
 修。で。え。来。た。ら。ぶ。志。は。活。業。な。く。ら。お。に。務。め。在。り。い。より。己。が  
 給。金。の。遺。り。な。く。こ。ま。の。老。る。父。母。に。送。り。書。ひ。ける。や。ど。ある。お。今



かく流浪の身となりて詮方なきにあらざりて一日覺えたる菓子  
と割して僅むろりと袂に帯之知るの方ふ持きて價と昇く鬻た  
聊の種分を得てその目くを嘗こけるがその父母の老婢少人の多く  
出入るを獲ひ日暮右小左のどれにその男のそのこと心憂く思ひ  
別小さやうなる家と借り一人住んで菓子と割一賣ありきて父母に  
不自由なきやう小心を著けその才と相計りて老父母を背ひける  
然るにこの夜地震少て逆き多く赤法は老若男女壓死にぬ  
はく小の心を空小惑ひ出てかの父母が居所へゆく小の志すて大  
小法は是と入るべきやうもむ一徳らそ父母の年老て是より弱け  
は穴定めて梁の下に掘りきけんと酒灌り泣悲とて崩き一赤と  
撥除け糸紙え漸く来て手如へ到るに葉のぶく板権け棟をて

へ地にあり。快へと心も心あつて力に任一本とて除け。赤の程と  
のささるををあげてゆままど。きりれるるを由りてま一人ありと  
一日えび。かくて逸早くその所を逃出一のるる。と暮時約港  
ありける所へ火の廻りとして弓張の挑灯を照し。二人来る者あり  
かの男の夢をみて。あの赤に抱一老史婢何方へうと退。おん身  
知りておんする也。と向へ火の廻りの男着へて得んを地震とのん  
りどれ。老史婢のさあ出ーと長屋ある甲乙が。多と携えて徳と  
兩國橋の方へ逃し。ささる大う怪我のあつと彼れを索ねるへ  
の。彼男の夢もあべ快の助りうのひーと夢と合せ天不むらひ  
時夢とて五度。そまより兩國橋のきりぬき。手如う此知るところ  
るに後小治と唱ふる所れ。つうあてありけま。男のんるより



孝子父母  
を護り人  
資財を  
忘る



つぎ南父母よ、そのふと居のひこそ娘一けと。涙を流し、  
おまる人の絆に、おき戸一枚と、借りうけ。こまを敷きて、父母を  
載せ、まづ是にて安堵せり。とかの伴ひ出さる人を、索ねて、恩を謝す。  
あや侍りを去やうに、半時をうり在りけるが、稍に夜ふけて、肌寒く、  
に心苦きて、老父母の、さぞう、多く在まらん。と、まじより、再び父母が  
伯居し、おに到り、幸とて、漸く横一ツせ、先出、肩にうけて出ると、死。その  
弟に出會て、如此の、よと告ぐ。その弟、兄より、その伯居遠く、  
まづ遅く、あうらうと、階下、さそ緒共に、度小語る。父母の絆に、  
まづその、を車と祝し、ける。この弟、の縁て、より。お別れ、まじり、妻もあつ。  
孫に、その所、由比、養つ、お居、いま、前、は、は、ま、ま、を、車、か、る、を、  
より、折、あて、道、治、に、神、吟、あ、つ、と、笑、父母の、さ、あ、あ、の、嫁、と、孫、の、身、の、

と、お案、下、つ、你、の、願、由、ま、て、稚、き、の、の、身、の、う、を、針、ら、よ、昔、は、こ、お  
あ、つ、て、孫、に、兄、の、傳、副、あ、ま、は、の、さ、う、心、あ、つ、と、な、り、と、兄、も、昔、に、勸、  
あ、ま、さ、い、と、そ、弟、の、あ、つ、と、ま、は、兄、の、終、夜、父母、の、侍、り、を、懐、つ、と、離、つ、と、  
か、程、あ、つ、その、夜、も、明、も、ま、ま、一、に、ま、一、梳、の、飯、も、な、し、と、お、於、て、始、め、  
て、心、づ、き、僅、む、り、の、鐵、あり、一、が、こ、の、強、勁、に、心、を、ま、懐、へ、抱、め、も、や、う、に、泣、  
出、て、後、の、日、も、お、願、う、い、と、な、も、あ、つ、に、父母、の、侍、り、を、離、つ、と、一、向、に、  
念、下、ら、う、し、お、あ、り、へ、の、夜、の、お、小、居、り、て、お、の、後、ま、ま、を、ま、ま、を、  
ま、し、て、げ、り、お、お、今、の、失、つ、つ、ん、と、い、他、に、お、隠、ま、し、ま、づ、ま、居、り、て、有、と、  
と、お、え、と、ら、う、し、お、お、告、立、居、り、て、お、お、と、ら、う、に、この、ま、ま、の、火、災、の、あ、  
ら、び、孫、に、養、の、後、ま、ま、と、ら、う、て、お、お、の、ま、ま、う、傾、ま、ま、の、ま、ま、の、お、お、  
お、あ、つ、ま、ま、の、ま、ま、を、ま、ま、の、お、お、に、出、り、時、の、ま、ま、を、何、と、

するのみ一男一犬小飲びて。残の懐に僅きなり。残るる飯及び穀  
 きしる菓子までも終りに入して其の母の父母の由進め自らの由今  
 且父母の近隣ある甲しふの恵とよそ。一時の飢を凌ぎけり。其の  
 所鏡にあつて親あるの志。維く由かあるべきなきこと。天災不能  
 の難ありと死。まづ其後未と圖るふより金銀貨財を先にして父好と  
 後ふするものあり。其の男と慈隔以

固小の夫正の順何来とくする士人あり。重く登庸の道とて其の  
 務む然るに性未金銀を好まざるを心けり。折るその  
 黄金と出。書院に遊んで多寡を試み。次井小鍾とて樂とくある  
 と死あの人例の如く。然る黄金と出。度き書院に并満て人  
 後面小笑を會と限り。其の樂とくして。其を賤をありけるなり

から人素つて今組下多。雅く仮初の喧嘩より。既れ及傷に及ん  
 とせ頼来つて鉄め之と急と告るものありけり。その人岐てお  
 積き黄金を納むるに賑まけり。其のち小てを由れ。其の  
 車彼是纏とあひて鉄めさう。其の疾を明し。翌月の月中退る  
 をりく輝の果し。其をさより。其に帰りが。幸小形をり。屯  
 たる黄金を生。書院へ出せしをり。不慮に瘧ぎの始まり。其  
 一屋敷に扱て。其に帰るまされども。更れその黄金を念とせ。其  
 に於て平生とより。士人あり。金銀を好むるを好む。いと陋と  
 織りのも多し。この道回の工よおのて。織りりのとまは。其  
 かくてこそ士人の志氣あり。と人さきと感むとのなり。その車は其  
 あるとも。その執の本文に。菓子賣の男に似たり



あり廿日むろりをさても行ゆり止まありけきば人々まひおきさる  
 流不の地震の始め者く大風の中あどつう雷の来りど志しとえ  
 是よりて純とすまば始めりどの大震ありと流しぬきとあふ  
 婦女子小兒のさひひのつふとあへ下頼うう。舊記を奉てその理を  
 曰方示はとその此の頓傷清山先生が著しう地震考との人書  
 此の記を以て説を以てまば始め大震ありて二日がむどの夜に二  
 十度も揺しとゆるが。去年十月に都の地震ありその後大小十度を  
 かり翌二日昼夜に五度四日小に度五日八度六日之度十日二度十一日  
 二度十日一度十二日の兩日二度。十五日由ま二度あて十六日二度十七  
 日之度十八日夜一度。この時少く雷兩あり。十九日二度廿日一度廿一日二  
 度廿二日一度廿四廿五の五日一度。廿六日二度廿七日一度廿八廿九兩日一度。

この月總計八十度のうち。至二十八度夜五十二度七の餘に記すに違  
 あらば夫より智遠くなることと。年を起ては五月までも折々微動在  
 けるに於てその波強あふん。才國舎にもの微動累月止はと記す。

先年系都より或人の伴小送り紙しる書快とて千人の足せり。

その前文化九年あや。十一月四日あて。都に流し。き地震あり。然ま  
 ども系崩まば。折々の土落少く。豊のりりるまであり。が迎奉つよ  
 き地震ゆゑ。さきで意の目的とて。縦がらの地震で圓經五分と一系  
 林始めて意ひして。圓經一寸むろり。小國に因て文化度の地震より。六  
 倍と知し。以下その目的小慣ひてりて。或ひの圓經一分二分。まて七  
 八分のものもあり。日時をさき委し記す。その時その地に在がて。

までの書快あり。是よりて。小遠回の地震系於より。度較も寡く。

揺も者一うらび。さうけきとど比震考ふ也。のさるく人々懼きて大路に  
 臥まりの少さうらび。固て日本橋へ何人。そや大震の来る理あけまら  
 安堵しておれ入也。然あつて後夜も不眠さる病に罹らんとて  
 辨一國字と附て書置かれぬ。安きやうに是と説せり。余も性かつと  
 小是と見て主人の至誠を感じ。さて文政の度系統の比震ふ。四方が  
 との旨法師朝おいて物の言をば大い訝りて僕を咄び。今日ハそれ  
 調子ねひて。かあや災ひのあらん日あり早く朝飯を煮てめて。滋誠  
 の方へ伴ふひゆけとの僕も豫て主人が明察覚得ることもなきに  
 主人に朝飯を進め。その身も俱に食ひたまひて。頓て多と推考え乃  
 と急ぎて。滋誠の色へおりに四方が狂も安堵せま。いまど此処に  
 て調子くらへ。さうば言さふ電るにあらば愛宕の傍何系ハ年

下十

素の初さうらと。你の知る所あり。とて彼処へ伴まるとの僕を説いて  
 密室に入り。かの傍の絆にゆり。傍へ入て研り。何事ありて早夫小  
 来り。と一やと問け。是ハ四方が養へてま。今目ハ調子一うら  
 び。ふふ系中誠却せんと。然まど。夜を人ふのへき事なう  
 ね。ま。我のこを。と出て。滋誠の方小至ま。と。控調子の。説さる。あ  
 この所。ま。来り。と。大息。ゆて。ひけ。は。傍。も。是。て。この。替。考。が。例。と  
 知。ま。ば。う。ち。強。き。ま。づ。是。下。が。心。あ。て。何。の。愛。と。察。し。る。畏。ま。さ。る。事。  
 と。ひ。ける。に。は。方。が。咄。て。我。も。ま。る。凡。ま。あ。ま。は。初。り。と。十。七。八。八。火  
 災。あ。う。ん。と。要。時。あり。て。ま。考。へ。ま。ど。此。処。ふ。て。も。調。子。ら。ひ。て。全。く。安  
 堵。ま。一。雅。一。今。少。う。ら。ま。き。所。へ。系。り。と。を。け。ま。は。傍。へ。咄。て。是。より  
 由。さ。き。と。の。入。復。摩。裳。なり。彼。処。へ。ゆ。り。て。え。よ。と。の。ハ。四。方。が。悦。び。ま。る。

只正身圖金

則音

多とひうきてその堂へ至りて。あてて銅子全く焼く。若くは木屑を  
 一斗そそぎ飽ちて煮て。安堵して居たり。その日申の刻迄は  
 暴に大地震動して。かの護摩堂の溪に隔り四方に王僕と小死に此  
 法師妙術を覚えて人の吉凶悔吝を知り。そのの祈すに。八九は必  
 外すことなり。然るに己が死場不至り。ことを知らざるのこれあらは選  
 て銅子煮たり。とて安堵して居たり。うづや或人ことを拜して云く  
 こそ至極の理なり。吉の極まる祈の凶に。凶の極まる祈の吉あり。喻  
 六陰極まりて陽を生むるごとくなり。既に必死の場に及んで凶邪  
 吉ふまれば或ひに九死一生の病人を卜するに乾為失及び地を焚ふ  
 どの吉卦を得れば知ぬ人。ことを吉とて欺べど。ことを凶とて凶卦  
 也。その人命活ぐ。是彼吉極まりて凶にまざる祈あり。とて処に

ころを平らするも更ん疑ふ。とて云く

○地下より火氣と發するの條

遠回地層のとき。地下より火氣を發し。余が及下谷池の端に居り。
 彼等地層よとのやどに急ぎ外のところから出る。小ま子の方へ盡  
 りて大光りと發す。但電の如く。その幅何十丈との量り  
 が。光が一面火氣を發して。鎮更に満る。こそ地中の火氣發して。
 光りある。との他所より光りの眼も遠く。との人あまこと。おぼろ  
 ま。この樹木など。茂りたる地。その明らに見え。珠ふかの天層に  
 て。忠懼のをり。あま。大。この光りを。知らぬ。池の端の。
 西北廣く。遙に。森ある。の。周て。その光りを。
 但。下。不出。泉。川。澳。に。あ。人。の。結。ふ。に。都。の。方。に。あ。





の

○神明萬民を憐れむの條

その頃雅のよとまら尊ら風祝せし。あの大農にあて。渾身傷損  
 ぬなく。況て今ても類さる老の。こま神明の加護によまら。因てそ人の  
 被をうるに。白き毛長二三寸あるのあり。こま修勢 皇大神宮の  
 昔より新雨て。あのもあるの災害を免るといひあへり。うらふ由雷  
 下若用の衣敷の被より白毛て見出ひのまらあつて。うらこのま  
 あらびと。いひ過ぎ語らまぎて世とまら。知らざるのかり。然まども  
 億兆の人民盡く然るにあらび。あまもまら不測あり。元来我 邦を  
 神國なり。貴族上下の入るの神明の擁護によりて榮えざるのほ  
 あのもも 皇大神宮より授けり。白馬の毛ありといふ余が。知已某ある

下十三

老人の深く信するところありて。そのこと疑ひを家内あらび近隣の男女の被  
 を探らするに多く。この毛出ふけり。長さ九七寸五六分白く。て疑あり  
 とま。夫神明の口計らひん。愈をりて疑るべうらび。遙くする神代より。  
 中古近世に及ぶま。さあぐの奇きまら。粗正使れぬ。裁まら。さ  
 て疑ひ証べうらび

按るに天保年中。修勢山屋ありといふ。こ流行。法西の人民老  
 少をいむ。修勢の 宗廟不修。て裁千番といふを。知らび。因て道  
 路を。院の輩ハその疲勞て。投んとて。或ひハ馬糞を出して。まら  
 せ。糞糞を出して。怒ふ食り。ま。草鞋を。施し。酒飯を。施ま。この故に。  
 城の盤頭を。修び。て出る老由。行路脚の。難あらび。救百里の。往返  
 小婢と。嗣び。因て。少人女子といふ。ども。欺き。祀さる。ま。更に。ま。

安政長昌金

長昌金



左指のふふあふん天比不正の氣ふあつて初のごときとあるなり。  
 脱に唐土ふゆの例あり唐の咸通八年七月下邳に沸湯を兩を  
 て考考と殺し宋の端平二年七月魚を兩せしとあり元の至元  
 二十四年土を兩に七七を初にの深きと七八尺半高盡く没死  
 せりその肉を兩一穀を兩に舊史に性くえぬる処何ぞ毛を由  
 兩さらん元より怪しむに是りのまゝ。その落る毛邂逅に人の被ふ  
 入るなり。と事ゆげ小祿論せり。を和漢の古例を引きそのり  
 所確論めきて。多く人毛で伝服は。然れども事とささる。去る天  
 保度毛を兩を。或人西域の書に致へま。頭微鏡をりて毛を懸  
 祝し。是毛にあふざる事と知り。その辨を一紙に上木し。知己の人に  
 贈りしとあり。余二枚をゆへに。今遺失して附近にあり。因て晴

紀のまて挙ぐ。并時候不順あり。夏月天小陰雲掩ひ。教日て  
 經て日光を見せ。因て石時の冷。乳行の毛。稲穀登るごに  
 至は。その時陰雲の中。に雲を生び。その貌毛のどろ。その長さ寸餘  
 より。二二尺に及ぶるのあり。然るに風のさあふ吹。北と墜。時  
 草木の精液を吸ひ。そのり。於て稻梁以下。菜蔬の類ひ。こま  
 熟せむ。國土飢饉に及ぶなり。西域の地ふ世とありて。その裏でゴスサハ  
 との。遠回降し。毛とひ。則そのゴスサハあり。頭微鏡あて。毛を  
 脊に七八の思懸あり。た。と。解のどろ。と。切り。き。所。あり。全。く。の  
 毛にあふ。蓋全體の色。定まらば。多く。黄に。思。て。帯。て。班。文。の。ゆ。き。在  
 る。と。少。れ。と。その。形。知。り。ご。ご。か。ま。遠。回。人。の。被。に。在。し。と。大  
 に。異。なり。後。の。識。者。の。考。へ。を。俟

○前土中より多く生ずる條

安政二乙卯四月初旬石及一畝比より前を生ずるの數幾千並より  
 を知らば農民の替殺さるのど聚めて二十五万七千條あること  
 前減トウといふをえび畠に入ると麥を食ひ大豆の蔓を喰荒  
 以。然はに翌五月小至り。何方とも多く殺すの能未つては前を  
 逐ふ故に大半を減むといふ。個々の能何より来るといふを  
 考ふる。土人のいふ海中より。忽然として出るとある。奇譚也  
 世に稱之。土人のいふ去年甲寅國中に竹実を生ずると許多之數  
 五万條石を以て食用とす。此がゆふふの氣は竹実の土中に埋  
 一が化して。土人のいふ。前年の頭小竹実の殼を頂くものあり。土中  
 くと從ひその殼自ら落るとも

下ノ十六

按るに唐の弘道の初め。梁の念ふ大なる前あり。長二尺餘在  
 けけるが。猫の爲小唾まると。于時殺百前。忽然と来る。かの猫は唾  
 殺ひ少選あつて。多餘前を聚む。州人を遣りて大前を捕へり  
 殺して。此のまを去るといふ。このる本文小異あること。前年の  
 によつて録は

○蝦蟇巨蛇と關ふ條

下總土の土人の話に。同七月十六日。下總相馬郡大田の里。小一丈四五尺の  
 巨蛇出る。そのとき丈一尺八九寸の蝦蟇出て。ことと聞ふ。互に雌雄を交  
 するところ。人々を驚かす。て。傳へ来る。そのの殺百といふ。一  
 らひ。然るにその夜。法に及び。捕閉ひて。交せむ。殺る人。終に果ま  
 小澤り。夜明て。殺すこと。聞ふ。かくて十八日。おび。子の朝。小ありて。巨蛇

死せり。蛇がまの行方ぎやうかたを知しるはとを  
 按おるは和漢わん之才さい園えん舎しやに。蛇へびを咬かふは裏うらあり。文字あざな集あつ界かい小せうのまに  
 小輪こりんの長なが大おほるは老らうれ

安政長月録卷之五終

安政三歲次丙辰初炅發行

服部氏藏梓

